近代鎌倉における別荘建築に関する研究
－旧前田家鎌倉別邸の設計者・渡辺英治の経歴を中心に－

姜　明采*、内田　青蔵**

The study of Villa in modern Kamakura
-Focused on the career of Eiji Watanabe, the designer of former Maeda family's villa in Kamakura-

Myungchae KANG *, Seizo UCHIDA**

１．はじめに

日本における別荘建築は、交通機関の発達及び西洋文化の導入により明治 20 年頃から急速に発展した。とりわけ、古都の史跡である鎌倉は、明治期において交通利便性の向上から海水浴場が開設されるなど、避暑避寒の面から人々の注目を集めた。こうした動きの中、華族、富裕層らは自らの理想の住まいを実現させるため、鎌倉に別荘を構えるようになった。『鎌倉議会史』[1] によると、1903（明治 36）年には 270 戸であった別荘が 1912（大正元）年には 480 戸に及ぶなど鎌倉は別荘地として盛んでおり、この動向は 1923（大正 12）年の関東大震災まで続く。

さて、筆者は、鎌倉における別荘建築の中心にあった旧前田家鎌倉別邸（現鎌倉文学館、以下「鎌倉別邸」と略す、写真 [2]）に注目している。鎌倉別邸は、明治中期頃に旧加賀藩第 15 代当主前田利嗣侯爵によって建てられた別邸が焼失され、その後数度の改修を経て 1936（昭和 11）年、第 16 代当主前田利為によって建設された。1983（昭和 58）年に鎌倉市へ寄贈されたのち、1985（昭和 60）年からは鎌倉文学館として活用されている。「ハーフティンバーとスパニッシュを基調とし」[3] ながら「1930 年代に流行したと思われる、アールデコの様式が随所に見られる」[4] ことが特徴で、近代鎌倉における別荘文化を読み解ける貴重な遺構である。

写真 1 鎌倉別邸

写真 2 渡辺栄治

さて、この度旧前田家資料を管理している（公財）前田育徳会の所蔵資料のうち、鎌倉別邸の建設過程や建築的特徴が読み取れる文献や古写真、図面類の未公開資料が多数確認できた（表 1）。この資料を通して、これまで不明な点が多かった鎌倉別邸の設計者・渡辺栄治（写真 2[5]）の建築活動 [6] を明らかにすることができた。本稿は、鎌倉別邸に関する研究の一環として、新たに収集きた（公財）前田育徳会の所蔵資料と拙稿 [7] での報告をもとに、渡辺栄治の経歴と作品を整理したものである。

表 1　新しく収集できた主な資料一覧（（公財）前田育徳会所蔵）

時期	資料名
明治期	鎌倉貸家絵図　付聴濤山荘図
1892（明治25）年5月31日	皇太后陛下鎌倉別邸行啓一件　行啓時部屋割図
1897（明治30）年9月11日	皇太子殿下鎌倉別荘へ行啓一件
1903（明治36）年以降	歳計決算書類　乙号（明治33～36年）
1909（明治42）年6月	皇后陛下鎌倉別荘行啓記録稿　聴濤荘図　鎌倉聴濤山荘之図
1913（大正2）年3月17日	皇后陛下鎌倉行啓関係（写真）
1919（大正8）年8月推定	鎌倉御別荘図面
1934（昭和9）年以降	鎌倉別邸青焼図面・筆写図面
1940（昭和15）年以降	鎌倉別邸新築届の件（昭和2～15年）
1941（昭和16）年	駒場別邸・世子邸改築の書類

２．渡辺栄治の経歴と作品

渡辺栄治は、1893（明治 26）年に山形県西村山郡村左沢（あてらざわ）の宮大工・渡辺栄蔵の一人息子として生まれた。1911（明治 44）年に山形県工業学校（現・米沢工業高校）を卒業し、翌 1912 年には村井銀行建築部に務めた [8]。この際、村井銀行日本橋本店などを設計した建築家・吉武長一 [9] に出会い、1915（大正 4）年には吉武の建築事務所へ転職した。

その後、明治神宮造営局の嘱託を経て、1922（大正 11）年からは田園都市株式会社が理想的な住宅地開発を目指し建築部を創設したことに伴い技師として転職した。同社取締役だった渋沢秀雄は「会社には矢部金太郎君のほかに、渡辺栄治君という建築設計家がはいった」[10] とし、渡辺を建築家として認めていた。

写真 3　手島重雄邸

写真 4　中浜東一郎邸

写真 5　関谷利次邸

写真 6　杉田主馬邸

*助教　建築学部建築学科
Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering
**特任教授　建築学部建築学科
Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

さて、戦前期に流行した建築がテーマ別に紹介された『建築写真類聚』[11]の文化住宅シリーズには、「設計 渡辺栄治」の住宅が4棟掲載されている（写真3～6[12]）。建築主は、東京電気会社員、医師、銀行員、海軍軍人のいわゆる中流層で、全て現在の田園調布3・4丁目（旧多摩川台）に建設された。写真でみるように、勾配のある2つの直交する切妻屋根を持つ2階建て住宅（手島邸・杉田邸）と、緩勾配で水平線を強調した屋根を持つ2階建て住宅（中浜邸・関谷邸）であった。いずれも洋風意匠を基調としたデザインで、中浜邸・関谷邸は「洋風中流住宅 ライト風」[13]と評価されている。即ち、渡辺はある種の理想的な住まいとして、当時流行したライト風のデザインを提案したと考えられる。しかし1926（大正15）年1月、田園都市株式会社内建築部の解散に伴い、渡辺は同社を退職した。

1926（大正15）年4月、渡辺は前田家本邸建築技術員として就職する。転職の背景として、田園都市株式会社での住宅設計の経験が認められたと考えられる。同年の前田家評議会にて本邸洋館の建設が決まり[14]、渡辺は1929（昭和4）年の竣工まで前田家本邸洋館の工事監督として務めた。

1936（昭和11）年に竣工した鎌倉別邸は、前述のようにスパニッシュ様式を基調とした3階建てであった。照明器具や暖炉等で見るアール・デコ様式の要素など、書斎（写真7[15]）にみる独特なデザインは鎌倉別邸の見どころである。

写真7 鎌倉別邸　書斎

鎌倉別邸のほか、渡辺は前田利建邸と内藤政道邸の設計を担った（写真8～9[16]）。詳細は以降の報告に譲るが、全ての外観にハーフティンバーの特徴がみられ、内部には随所にアール・デコ様式の影響がうかがえる。

写真8　前田利建邸

写真9　内藤政道邸

3．まとめ

本稿は、鎌倉別邸の設計者である建築家・渡辺栄治に注目し、この度収集できた新しい資料をもとに、経歴と主要な建築作品を整理したものである（表2）。

山形県出身の渡辺は、1911（明治44）年に山形県工業学校を卒業して上京し、村井銀行建築部、明治神宮造営局、田園都市株式会社を経て、1926（大正15）年4月より前田家の建築技術員として勤めた。

設計作品としては、田園都市株式会社在籍時に手島重雄邸や中浜東一郎邸などの4邸を設計し、前田家在籍以降は、旧前田家本邸洋館の工事監督として関わるほか、前田利建邸、鎌倉別邸、内藤政道邸といった旧華族の邸宅など、洋風デザインの住宅に多数手掛けたことが明らかとなった。

表2　渡辺栄治の経歴

年代	事柄
1893（明治26）	山形県大江村の宮大工の家に誕生
1911（明治44）	山形県立工業学校(米沢工業)卒業
1912（明治45）	村井銀行建築係に就職
1915（大正4）	吉武長一建築工務所勤務
1917（大正6）	明治神宮造営局勤務
1922（大正11）	田園都市株式会社入社
1924（大正13）	手島重雄氏邸（設計）竣工 中浜東一郎氏邸（設計）竣工
1926（大正15）	関谷利次氏邸（設計）竣工 杉田主馬氏邸（設計）竣工 前田家建築係に就職
1927（昭和2）	前田家本邸洋館上棟（嘱託監督）
1929（昭和4）	前田家本邸洋館竣工（事務所主任）
1930（昭和5）	前田利建邸（新邸）設計に着手
1933（昭和8）	前田利建邸（新邸）竣工 服部金太郎邸新築事務所勤務
1934（昭和9）	鎌倉別邸設計に着手
1935（昭和10）	鎌倉別邸改築上棟（設計）
1936（昭和11）	鎌倉別邸改築竣工
1937（昭和12）	内藤政道邸設計契約 内藤邸設計打合せ
1938（昭和13）	内藤政道邸竣工 侯爵前田家嘱託
1945（昭和20）	前田家より駒場の土地購入
1946（昭和21）	自宅を新築
1975（昭和52）	82歳で没す

【注】

[1] 鎌倉市議会，鎌倉議会史 (1969).
[2] 筆者撮影
[3] 文化庁「国指定等文化財データベース」鎌倉文学館本館 https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/181573，2023.7.3 閲覧.
[4] 鎌倉市，鎌倉市重要景観建築物等指定調査報告書，7 (2013).
[5] 渡辺家所蔵古写真より抜粋。背景に渋沢秀雄邸（1924年竣工）の工事中の様子が写っていると推察されるため、撮影時期を1924（大正13）年頃と推定する。人物特定は渡辺家家人による。原本不鮮明。
[6] 吉田鋼市，鎌倉近代建築の歴史散歩，港の人 (2017) ／堀勇良，日本近代建築人名総覧，中央公論新社，1503 (2021)などで出身校の情報や「前田家建築係」であったことが示されている。
[7] 拙稿: 茶谷亜矢，内田青蔵，姜明采，建築家・渡辺栄治の経歴と作品について，日本建築学会計画系論文集，88 (806)，1432-1437 (2023.4).
[8] ここからの経歴は、（公財）前田育徳会に所蔵されている「渡辺英治の履歴書(1926)」に基づくものである。
[9] 吉武長一（1879-1953）は山口県出身で1902（明治35） 年に建築研究のため渡米し、ペンシルニア州コレスポンデンス・スクール建築科で学び7 年後帰国、海軍省、村井銀行建築部長を経て設計事務所を開設した（前掲注6）日本近代建築人名総覧，1475）.
[10] 渋沢秀雄，わが町，沿線新聞社 (1971)
[11] 1915（大正4）年から1943（昭和18）年にかけて建築専門出版社・洪洋社によって発行された定期発行の建築写真集。
[12] 洪洋社，建築写真類聚 文化住宅 巻三，4 (21) (1924).／洪洋社，建築写真類聚 文化住宅 巻四，5 (13) (1926).
[13] 藤森照信ほか，東京の幻影 大正・昭和の建築，柏書房，248-249 (1998).
[14] 東京都，重要文化財 旧前田家本邸洋館ほか一棟 保存修理報告書，東京都教育委員会，10 (2018).
[15] 財団法人鎌倉芸術文化振興財団，鎌倉文学館収蔵コレクション (2002).
[16] 竹中工務店，合名会社竹中工務店建築写真集 第三集 (1933).